

1.2 薬師瑠璃光如来の三段腹（トリ・ヴァリー）

私、あまりテレビを見ない方なのですが、とりわけ、年末年始のテレビ番組は、どれも同じようなものばかりで、ついつい、ニュースばかり見てしまいます。

でもね、できるだけ正確であって欲しいなあと思うニュース報道でも、最近は何となく変な内容に出くわすことが多くなったような気がします。

どうも私、自分で気がつかないうちに、ブツブツ独り言を言っているらしくて、私がテレビを見出すと、家族たちは、いつの間にかいなくなるような気がするの、気のせいですかね。

先日も、薬師寺の年末「お身拭い」の報道を見ていたら、若い女子アナさんがこんな「アレっ？」ということをやっていたのが気になりました。少々正確さを欠くかも知れませんが、こんな感じでした。

「これですっかり、薬師如来様も日光、月光菩薩様も、黒光りする美しいお姿を取り戻しました。」

この女子アナさん、ひょっとすると、これらの仏像、作られたときから黒かったと思っていませんか。

私、美術の分野については、間違いなく素人と言っているのですが、薬師寺のこの薬師三尊は、作られた時には、お名前（薬師瑠璃光如来）にふさわしい黄金色に輝く姿であったこと、その後に(火災によって?)金箔がはげ落ち、今のような黒い姿になったことくらいは知っています。



この報道は、何の気無しに聞いている多くの方々に対して、初めからこの三体の仏像が黒いものだったと思込ませしてしまう、ある種の危うさを持っていませんか。

おまけにね、続いて、この女子アナさん、「この仏様は、薬師寺を襲った何度かの戦火の度

に、寺の人たちによって担ぎ出され、難を免れたのです」と言ってるんですよ。

なんだ、火災に遭ったことも聞いてるんじゃないの？

でもね、担ぎ出されたというのはないんじゃないの？

何気なく聞いていると、おかしくは聞こえないのかもしれないけれど、この仏様、金銅仏だから重いんですね。ひょっとして2、3トもあるかも。

木造仏、乾漆仏ならともかく、少なくとも「担ぎ出された」という言葉は、どうも私には適切とは思えない。誤解を与えませんかね。

ひょっとしてこの女子アナさん、こんな近くにいて、ちゃんと見てないのじゃないの？

こんなことを思いながらニュースを見ていると、ぶつぶつ言いたくなるのもしょうがないと思いませんか？

さて、わが家族同様、そんなに細かいことばかり言っていると気難しい偏屈ジジイになっちゃうぞ、とお思いの皆様に。

蛇足で、ちょっとだけ、下世話なお話。

写真は、薬師如来様の左右に立つ脇侍の日光、月光菩薩の妖艶とも言えるお姿。



このプルンとしたフックラお腹と三段腹を示すお腹の襷を見て、私、昔、「この仏さま、中年太りじゃないの」と思ったことがあるんですね。

若気の至りというか、知らないことはおそろしい。

実は、これ、

「細き腹の三条の襷（トリ・ヴァリー）」

と言って、かつてインドにおける美人の必須条件だったんですね。

ある本で、このトリ・ヴァリーのことを読んだとき、「細き腹」なのに、「三条の襷」があるって、おかしくない？ って思っていたのですが、薬師寺で、この二体の妖艶な菩薩様を前にして、専門の先生から、お話をお聞きしたときは、目から鱗。顔から汗。

自分の不勉強を棚に上げて、勝手な思い込みの余りの愚かさに顔から火が出る思いでした。
ですからね、ホントは、人のことを笑える身ではないのですけどね。

トリ・ヴァリー、写真でも、褌、はっきり見えるでしょ。
単に太って三段腹になっているのとは、決して同じではないのですね。
念のために、風呂場の鏡で、自分のお腹と比べてみて下さい。

あ、そうそう。

オン コロコロ センダリ マトウギ ソワカ

どうか、調べもせずに、不届きなことを思い描いた私を許していただきますように。
(去年、神さまに不届きなことを言って、罰が当たったもので、とりあえず)。

12.15 正月事始

先週、ぼーっとニュースを見ていましたら、各地の神社で煤払いの行事をしている様子が流れていました。

ああ、もう「正月事始」かと思って、今週の授業のコーヒブレイクで、その話をしたら、学生たちの反応は「それなんですか？」

もう、今の学生の親たちの世代は、「正月事始」どころか、煤払いもしないのですね。ひょっとしたら、家の門の前に注連飾りもしないのじゃないかと思って聞いてみたら、ホントにしないのですねえ。

このままだと、我が国の伝統ある「お正月」の行事もなくなってしまいそうです。

我が国の昔からの庶民の年中行事のうち、最も大々的に行われるのは、なんと言っても「お盆」と「お正月」。

農村地域では、この二つの他に、その年の豊年を祈願する「春祭り」と豊年に感謝を捧げる「秋祭り」がありますが、これらは、都市を巻き込んだものとは言えないところがありますので、まあ、全国的な目で見れば、盆と正月を国民的二大行事とすることには余り異論のないところと思います。慣用句にも「盆と正月が一緒に来たような」なんて言いますでしょ。

ところで、この二つの行事に共通するのは、どちらも祖先の霊を祀るという点かと思えます。

なぜ二つあるのかについては、とても字数制限のあるこの日記で説明することは難しいのですが、結論から言えば、お盆は仏教サイドの色彩の強い行事で、お正月は神様系の色彩の強い行事といえ、なんとなく領けませんか。

まあ、私どもの民族は、どこかの大陸系の度量の狭い方々と違って、仲良く、神様と仏様、両方を立てているのですね。

こういうところは、2000年も続いたローマ民族と似ているのを感じますね。

さて、最近は何も意識していないのが残念ですが、お正月は、年神（としがみ）様をお迎えするお祭りが本来の姿。

年神様は、亡くなった祖先の魂。山に還った祖先の魂は、新しい年の初めに、里へと戻り、その年の豊作と子孫の繁栄と幸せを守り、秋の収穫を見届け、再び山に還ると信じられていました。

お正月は、この年神様を迎え、心を新たにして、一年をスタートするための大切な行事なのですが、この年神様をお迎えするために、半月以上も前から、家をはらい清め、準備を

したのですね。

ちなみに、松飾りは、年神様とその家に降りてくるための依り代（よりしろ）。
これがない家には、降りてこないのですよ。

注連飾りは、門前に結界を張って、屋敷うちに魔物や疫病神が侵入してこないようにするためのもの。

注連飾りをしない家には、鬼も魔物も入り放題。

ちゃんとするのをしないで、今年はツキがないとか、運がないとか言ってませんか。



鏡餅も、おせち料理も、御神酒も、みんな年神様に喜んでもらうためのもの。

去年は、年神様のおかげで、こんなに豊かで幸せな暮らしができました、という気持ちを伝え、喜んでいただければ、今年もきっと年神様がちゃんと守ってくれるだろうというのですね。

ですから、大晦日の夜、除夜の鐘を聞くのは、旧年を取り除く夜の大切な行事、これをして、年神様お迎えをしてから、年神様と一緒に朝のご来光を拝むのですね。

紅白歌合戦を見ながら飲んで酔っ払っていたのでは、旧年の厄は落ちず、年神様をまともにお迎えもできず、一緒にご来光も仰げない。

元日の朝は、屠蘇を飲んで、蘇（病気を起こす鬼）を屠ってから、年神様がいただいた後に、おせちをいただきます。

ここまでは、大晦日からお正月にかけての正式行事。

これらは、すべて一家の主人たる男がするのですね。

日頃、何もしないで、奥様に任せきりのあなた！

このときばかりは、主役なんですよ。

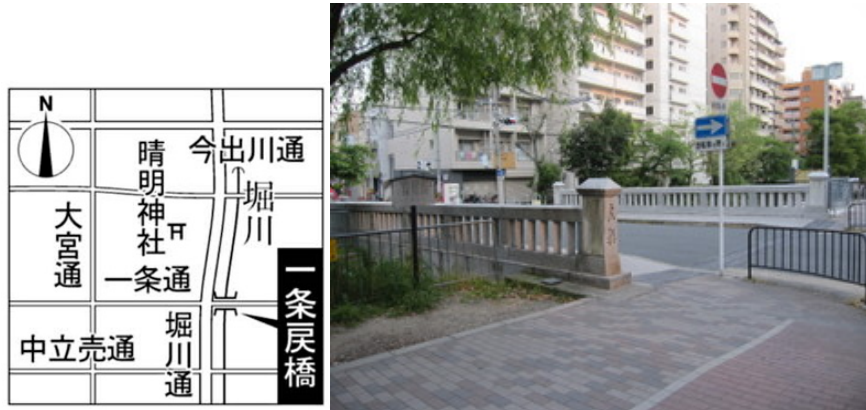
正月のいろんな行事が廃れていくのを見てみると、男の地位の低下のせいだとしみじみ感じられて、寂しい。

せめて、この日記を読まれた夫諸君、一年に一度くらいは頑張ったらいかがでしょうか。

12.26 一条戻り橋

「一条戻り橋」の名前は有名ですから、お聞きになった方もおられると思います。

京都市内を南北に流れる「堀川」と東西に走る「一条通」の交差する場所に架かる橋で、今はなんの変哲もないコンクリート橋ですので、注意をしていないと見過ごしてしまうほどのちっちゃなものです。



この橋は、平安時代から場所が変わっておらず、非常に多くの昔のお話に登場します。特に、最近流行っている「安倍晴明」さんの怪奇譚ではしばしば登場しますし、昔の話では「渡辺の綱」さんが鬼の腕を切った話などは有名です。

今の御所は、ご承知の通り、北が今出川通り、南が丸太町通り、東が寺町通り、西が烏丸通りに面していますが、昔の内裏は、今の場所よりずっと西側にあり、東の端が堀川、北の端が一条通に面していました。

そうですね。

どうして一条から九条まである平安京なのに、御所の北端が一条から始まらないのは変だとは思いませんか？

それはともかくとして、堀川と一条通との交差点は、昔で言うと、内裏の北東の端。鬼門だったのですね。

昔の施政者は、鬼門を大変気にしました。

鬼門は鬼の出入り口ですしね。

京都の場合、鬼門の方向に当たる比叡山に延暦寺が置かれ、江戸の場合、江戸城の東北に上野の寛永寺が置かれてましたが、寛永寺の別名は「東叡山」と言われていました。

このほか、昔の城下町の多くは、東北東に「護国寺」或いは「護国神社」を置いていることが多いのです。城下町にお住まいの方、調べてみてください。

安倍晴明さんのお屋敷は、この一条戻り橋のすぐ近くにありました。これは、鬼門の守護に当たる役割を与えられていたためと言われています。

今は一条戻り橋から 200 ほど西側に清明神社があり、鬼など屁とも思わない若い女性たちで賑わっています。

先ほど出てきた「渡辺の綱」さんの親分の源の頼光さんの屋敷もこの傍にありました。文武両道の達人を配置しなければならないほど昔の人にとって鬼は怖い存在だったのでしょね。

話は横道にそれますが、千利休の京屋敷も、この清明神社の敷地内にあったといわれています。秀吉によって切腹させられ、首を曝されたのも一条戻り橋です。

今も、堀川寺之内に表千家会館や茶道資料館があることは茶道をなさる方にはよく知られていると思います。

さて、一条戻り橋に関する現代の怪談。

今の戻り橋は、1995 年に架け替えられたのですが、その際、ナント！橋のたもとから石棺が出てきたのです。

伝説では、安倍晴明は自分が使っていた式神（映画では蜜虫さんが有名ですね）のうち、十二神将を櫃棺に入れて一条戻り橋に埋めておいたと言われていたのです。

愕然とした当局は、中を開けて調査しようとしたのですが、実際には誰も恐ろしくて手が出せず、押しつけあいがおこってとうとう開けられませんでした(というウワサ)。

で、結局、どうなったかって？

元のまま、そっと一条戻り橋の袂に埋め戻したそうです。

誰か、掘り起こして開けてみようと思う剛毅な人いませんか？

開けたとたんに、中からパッと白けむり。

うわぁ！

夢枕獏の世界ですねー。

この先、想像すると面白いですね。

御年 1200 歳を超える十二爺将がヨタヨタ出てきたりして。

あ、今でも、京都市民の冠婚葬祭の列は、決してこの橋を通らないのですから、清明神社に行かれる新婚さん、気をつけましょう。

12.29 大晦日のおせち

私の友人の一人、北海道のMさんのブログの中のお話なのですが、Mさんのお宅では大晦日に盛大に「おせち」をいただくのだそうです。

私、これ、少し前に「ケンミンショー」で見て知っていたのですが、なにしろ当時忙しかったので、「へえー」と思っただけで、「どうして？」までいかなかったのですね。

今回のMさんのお話は、年賀状をほぼ書き終えて、紅茶を飲んでまったりとしていた私を刺激したようで、よしやあいいのに、次のようなコメントというより質問を書き込んで見たのです（小人は閑居するとロクなことをしないのです）。

以下、原文のまま。

>北海道民の方への疑問。

一 (大晦日におせちを食べてしまうと)お正月は、ナニを食べるのでしょうか？

お雑煮もおせちと一緒に大晦日なんですか

二 年越し蕎麦は、盛大におせちを食べた後に食べるのでしょうか？

三 お屠蘇は、いついただくのでしょうか？ これも大晦日ですか？

四 ひょっとして、子供達へのお年玉も、大晦日にあげるのではないのでしょうかねえ。

五 大晦日におせちをいただくのには、何か理由があるのでしょうか？

お正月におせちやお餅をいただくのは、周りの商店をはじめとして、みんながお休みするからという実質的理由もあるらしいのですが、北海道ではお正月もお店が開いているのでしょうか？

以上、ヒマなので質問してみました。

とりあっていただかなくても文句は言いません。

今読み返してみると、これ、イチャモンつけてるのと同じですねえ。

大人げない。恥ずかしー。



ところが、私と違って真面目なレディ、Mさんは、怒りもせず、次のような回答を書いてくれました。

>お正月は、「おせち」の残りを食します^^

我が家では、お雑煮はお正月です。

年越し蕎麦は、お腹を休めた後、除夜の鐘が鳴る前に急いで食べます。

お屠蘇とお年玉は、お正月に。

これは、あくまで我が家の事で、他のお家の事は分かりません^^;

どうして大晦日に「おせち」を食べてしまうのかは、大きな疑問です。美味しい物は、美味しいうちに・・あるいは、明日に何が起こるか分からないという危機意識なのか・・

私は、大晦日もお正月も一日違いだから、まー早くてもいいんじゃない。といった道民の大らかさ or いい加減さかとも思っておりますが^^;

なお、札幌では元旦からお店開いているのですよー

正直なところ、無視されるか、斜に構えた返事が来るものと思い込んでいた私、なんとなく、直感でこのままではマズイと思って、ちょっと焦り気味に、書庫に飛び込んで、食べ物関係の本を片っ端から探しますと、ありました！

蒲鉾屋さん？の○文の方がお書きになっていたものですが、要約します。

大晦日におせちを食べるのは、旧暦の「年取り膳」の名残りだそうです。

明治5年以前のおが国では、旧暦が使われていましたが、旧暦では、お正月になると一つ歳をとることになります。いわゆる「数え歳」ですね。

もう一つ、旧暦では、一日は日没と同時に終了することになります。

従って、大晦日の日は、日没と同時に終了し、日が沈めば次の日（お正月）になっているということらしいのですね。

新暦の大晦日に当たる夜におせちを食べるのは、新しい年になって、一つ歳をとることのお祝いだそうです。

さて、もっと調べてみますと、この旧暦の習慣は、東北、北海道にかけてかなり広く残っているのだそうです。

私、思うに、明治新政府の政策の一つである新暦に今ひとつ納得できず、旧暦を尊重し、昔ながらの伝統を守っている方々は、ある意味で骨太というか、立派なんですねえ。

どうりで、東京には大晦日におせちを食べる習慣はないのですね。

12.30 冷たい盛りと熱い盛

一条戻り橋のお話を書いた後、「十二神将」を「十二爺将」なんて言ったタタリか、体調が突然悪くなって、寝込む事態になってしまいました。

ゴメンナサイ、もう決して神様の悪口は言いませんから、と許しを請うて、なんとか復調しつつありますが、ものを書く気力まではなかなか戻りません。
今年は、ちゃんとしたお話はこれが最後かも。

ということで、今日は、少し早いけれど「年越し蕎麦」のお話。

大晦日に蕎麦を食べる習慣は、現在、ほぼ全国に広がっていて、その習慣のなかった沖縄でも、今は、ソーキソバを年越しに食べるのだそうです。
でもこれ、ホントかなあ。ちょっと怪しい。

誰かさんが調査した結果、年越し蕎麦を「カケ」で食べる人と「モリ」で食べる人の割合はほぼ半々とのことでした。

「蕎麦掻き」や「ソバ団子」でなくて、細く長い形であれば、カケでもモリでも良いようですから、寒いときになんで冷たい「モリ」なんて！と言われる筋合いはありません。

ただ、年越しソバは、年を越して食べてはいけないって知っていました？

昔子供の頃、紅白歌合戦に夢中になっていて、終わってから伸びたソバを慌てて啜っていて、母にこっぴどく叱られたことがありますので、私、これは忘れません。

ところで、冷たい「モリ」を食べる方、モリソバが乗ってくるセイロは、なんのためかご存じですか？

この間、学生に聞くと、全員がソバについて水を切るためという答えでした。

蕎麦通の方はご存じのことと思いますが、これは、単に、その昔、ソバを蒸していた頃の名残り。

え、昔から茹でていたのではないの？

いえいえ、昔は、つなぎ無しの10割ソバだったので、茹でると短くバラバラになってしまうため、そのまま蒸していたのですね。

しかし、蒸したソバは、なんと言っても、コシはない。つるつると啜ることも出来ません。

どちらかと言えば、もちもち、かみかみと食べる感覚。

これでは江戸庶民にモテる筈もなく、つなぎが出てきて、打ち方に高度な工夫がされて来ると、茹でソバに圧倒され、次第に、蒸し蕎麦は廃れていくのですね。

でも時代劇映画を見ていると、ときどき、時代に合わせて、蒸し蕎麦で酒を飲んでいるシ

ーンに出くわします。例えば、鬼平犯科帳の長谷川平蔵、「オヤジ、セイロ 2 枚と熱いのをつけてくれ」
どこでわかるか？って。

出てくるセイロのふたを開けるとソバに湯気が立っている。
冷たい「もり」じゃあなくて、熱いもり、つまり「あつもり」ですね。
いやあー、良い監督ですねえ。

さて、その蒸し蕎麦。今では殆ど見かけないけれど、僅かだけれど蒸し蕎麦を出しているところがあります。

私をはじめ蒸し蕎麦を食べたのは、京都勤務時代。

御所の南西、烏丸丸太町から 100 ほど上がったところの路地（ろうじ）を西に少し入ったところにある「竹邑庵 太郎敦盛」
近くに京都府庁や日赤病院などがあるので、お昼は混んでいます。

「あつもり」一斤半を頼むと、しばらくしてセイロが運ばれてきます。
蓋を開けると蕎麦の香りが微かにする湯気が立ちます。
これを山盛りの九条ネギと卵が入った「タレ」に浸けていただく。
「つゆ」ではありません。
普通の蕎麦より色はかなり黒く、口に含むと蕎麦の香りと味が何とも言えません。
食感は、もちもち。つるつるにはほど遠い。
蕎麦は、つるつる、ずずーと吸り込むのが一番という人には不評間違いなし。



ところで、「あつもり」の謂われなのですが、一ノ谷の合戦で討たれた平家の貴公子、平の敦盛とは関係がなさそうで、単に「熱い」「もり蕎麦」と「敦盛」との語呂合わせ。

でも、江戸の川柳に
「かへさせ給へとあつ盛のそばを強ひ」
というのがありますから、
江戸の庶民にも、平敦盛のファンが沢山いたのですねえ。
蛇足ですが、「かへさせ給へ」は、「とって返す」と「お代わり」を掛けたものです。

では、皆様、良いお年を。

12.31 今日は大晦日

今どき、これを「おおつごもり」と呼ぶ人はいないと思いますし、言ってもそれ何？と言われるのがオチですが、私、失われた近世の面影を少しでもという気持ちがあるせいか、他人と話す場合以外は、時代遅れの「おおつごもり」を使うことにしています。

「晦〔つごもり〕」は、「月が隠れる日」すなわち「月隠〔つきごもり〕」が訛ったもので旧暦では、毎月の最後は新月なので、毎月月末は「つごもり」。一年の最後は、大を付けて「おおつごもり」。

一方、「みそか」の方は、元々「三十日」という意味だから、正確には、月末とは限らないので、ここは世の中の流れをよそに、つごもり組は、秘かに正統派を自認しています。

「大みそか」を「大つごもり」とよんでいて有名なのは、江戸時代では、なんと言っても井原西鶴クン。

「世間胸算用…大つごもりは一日千金」や「西鶴諸国はなし」の「大つごもりはあわぬ算用」。

これ、どちらもすごく面白いのですが、なにせ、イマドキは古文は頭からイヤという人が多いですからねえ。残念なことです。

短編の名手、西鶴クン、読んでもらえないのは、可哀想ですねえ。

読むと、江戸時代の大晦日の大変さがホントによく分かるし、師でさえ走るといってもな一るほど、と納得できること請け合いです。現代語訳でも良いんですがねえ。

さて、明治に入ると、なんといっても樋口一葉さんの短編「大つごもり」。

大店に女中奉公に出ている少女のお峰は、世話になった伯父夫婦の暮れの窮状を見かねて、僅かに2円のお金をくすね、1年間の清算をする大晦日に、それが露見しそうになって自殺を覚悟するのですが、最後に見事などんでん返し。

樋口一葉さんの小説も、今では読む方が少なくなっているのではないかと思います。短編小説にかけては天才ですね。

次の部分は、少女の「お峰」がやむなく金をくすねる場面。

「神様仏さま、私は悪人になります。成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなされませ、勿体なけれど此の金ぬすまして下されと…」

大晦日をなんとか首をくくらずに過ごすためのたった2円の金を借りられなかった少女の

心がひたと伝わって来て、私は胸を打たれます。
大晦日は、今と違って、庶民は本当に必死で年を越したのですね。

樋口奈津こと、一葉が創作活動を行ったのは、僅かな期間にすぎません。
1894年暮れから1896年1月までのほぼ1年。

胸を病んでいた彼女は、この年の秋に24歳で亡くなるのですが、
女手一つで一家を支え、奮闘していた彼女の貧しい生活経験なしには絶対に書けない「大つごもり」です。

5000円札の肖像を眺める度に、大つごもりの「お峰」の顔が見えるような気がする私です。



さて、平成の現在では、さだまさしクンの「おおつごもり」でしょうか。

これも、今では余り聞くことの少ない歌ですが、
私は、この歌の歌詞がとても好きです。

♪ どんなに辛い年でも
どれほど苦しい年でも
全て、今年に詰め込んで
悲しみにさようなら

来年は、皆様にとってきっと良い年になることを願っています。
1年間、お付き合いいただき、有り難うございました。